

2011 年度 卒業論文

「外こもり」の実態に関する研究 ～バンコクのゲストハウス宿泊客の事例～

一橋大学社会学部 4 年

河野健太

本論文は、第 1～6 章、結語の 7 つの章から構成されている。第 1 章では研究目的や研究に取り組む動機について論じ、第 2 章では先行研究についての分析を行っている。第 3 章から第 5 章にかけては筆者がタイ・バンコクで実施した調査の手法と結果に関する考察に触れ、6 章と結語では全体の総括と筆者の見解を述べた。

第 1 章 なぜ「外こもり」に目を向けるか？

まず、ここでは「外こもり」とは「日本で日雇い仕事などをして一定の収入を稼ぎ、ある程度資金が貯まるとタイやカンボジアといった物価の安いアジアの国に行き、そこでは働かずに気ままな生活を送り、資金が尽きたらまた日本に戻り短期間だけ働くという生活スタイルを延々と繰り返している者」として議論を進める。この研究の目的は「外こもり」の実態の確認ならびに、日本社会や出移民における位置づけを明らかにすることである。先行研究は「外こもり」の内実が不分明なまま行われ、研究対象も青年層に集中した若者論であった。また、統計データの不足という限界も浮かび上がる。こういった問題意識を前提とし、本研究では「外こもり」という人々の実態を、タイ・バンコクで行ったゲストハウスの宿泊者に関する調査をもとに提示する。さらに、これまでの日本の出移民と「外こもり」の比較を通じ、「外こもり」の日本社会や出移民における位置づけを明らかにする。

第 2 章 「外こもり」とは誰であったか？

「外こもり」は、1970 年代から日本で増加したバックパッカーや「沈没組」と呼ばれる存在が同一都市で長期間滞在するようになったことで誕生した。「外こもり」になる理由は日本にいられないという消極的理由（Push 要因）とタイにいたいという積極的理由（Pull 要因）の 2 つに大別でき、買春等を求める「第 1 世代」、日本人コミュニティの共同生活を楽しむ「第 2 世代」、他人に気兼ねのない個人の生活を楽しむ「第 3 世代」へと変容している。心理学的に見れば、「外こもり」は一般的な人々に比べ、現実逃避や物事を深く考えることを避ける傾向にあり、海外で自ら生活を営むというその場しのぎで場当たりの行為自体は、「acting out（行動化）」という防衛機制にすぎないとされる。こういった研究の限界としては、研究者ごとに「外こもり」イメージが異なり、その数的データも明らかでないという「外こもり」の内実の不分明さと、研究対象が青年層に集中し、中高年層の「外こもり」に関する調査が不足していることの 2 点が挙げられる。

第3章 調査の概要と手法

調査1、バンコクにあるゲストハウス(日本人宿)の宿泊者に関する調査では、タイ・バンコクにある「日本人宿」と呼ばれる日本人専用のゲストハウスに過去8年間で滞在した顧客のうち、滞在期間が2か月(60日)以上であった短期の「外こもり」と判断できる日本人を抽出した。彼らについて年齢分布、男女比などの属性を調べ、近年の「外こもり」の数的変化も明らかにする。調査2、現地に2月以上滞在する中高年、高齢層(50-60代)の日本人に関する調査ではタイ・バンコクにあるゲストハウスやアパートに住む中高年の日本人男性に対してインタビューを行い、彼らが現在の生活をするに至った経緯や生活の様子を明らかにする。その上で、これまでの先行研究で「外こもり」とされた人々との比較を行い、この中高年の日本人男性が「外こもり」と呼ぶことができるのか検証を行う。

第4章 ゲストハウス宿泊者の属性

この調査では、バンコクのゲストハウスに2か月以上の滞在を複数回行った日本人58名を「外こもり」とみなし、その属性を明らかにした。調査の結果から明らかになったことを簡潔にまとめると大きく3点ある。まず1点目に「外こもり」の年齢分布であるが、これについては青年層とされる20-30代が全体の55%を占めるのに対し、中高年層とされる50-60代が33%を占めることが分かった。これにより、「外こもり」において中高年層が無視できない程度の数で存在することが明らかになった。2点目に「外こもり」の男女比率であるが、実に97%が男性であり、女性はわずか3%にとどまった。今回の結果が「外こもり」の全体像を示すものではなくとも、男女比率にはかなり大きな偏りがあることが明らかになった。そして3点目に「外こもり」の数の変化であるが、2006年から2011年の過去6年間で一貫して増加傾向にあることが明らかになった。

第5章 海外に住む、新たな中高年日本人男性

バンコク周辺に住む中高年の日本人男性3人のインタビュー結果の概要を報告した。20-30代の青年層の「外こもり」と中高年男性の違いは、日本にいられないというPush要因と社会性に最も大きく表れる。青年層が、会社の人間関係がうまくいかなかった。会社になじめなかった、家族との折り合いが悪い、労働意欲が低く、定職に就き、働き続ける気力がわかない、日本で生活していくだけの経済力がないといったPush要因を抱えるのに対し、中高年層は家族の喪失、離縁、年齢的に就職が困難、日本で生活することは不可能ではないが、医療費など高齢に伴う大きな支出に不安があるといった事情を抱えての移住であった。社会性の面では、青年層の「外こもり」は母数も多く、ネットワークが強いのにに対し、これら中高年男性は母数も少なく、人間関係が希薄な状況に置かれている。これらを踏まえて大まかに言えば、これら中高年男性たちも青年層と同じく「外こもり」の一群に含まれると言えるが、その内実は必ずしも一致しないということが明らかになった。

第6章 再考。「外こもり」とは？

独自の調査から見えるものとして、「外こもり」は20 - 30代の青年層ばかりでなく、50 - 60代の中高年層も存在し、また「外こもり」の大多数が男性であるという2点が大きい。特にこれまでの研究では言及されることの少なかった中高年層の存在が明らかになったことは価値がある。さらに、3点目には「外こもり」はこの6年間で着実に増加しているという1つのデータを獲得したことも注目すべきである。この6年間で日本とタイ、そして世界を取り巻く環境は大いに变化した。リーマンショックという深刻な経済恐慌は各国の景気を悪化させ、雇用難を生んだ。タイにおいては2度の大きな政変があり、政情は不安定となった。しかし、このような外部環境の変化を受けてもなお「外こもり」は増加傾向にある。こういった一見矛盾ともとれる調査結果から、「外こもり」になるPush-Pull要因のうち、経済的側面のもたらす影響については更なる調査が必要であることが指摘できよう。

第5章で取り上げた中高年男性の姿を追う中で浮かび上がるのは、海外に住む裕福な日本人の老人という、もはや過去の遺物とも言える日本人イメージではなく、日本に居場所を失い、タイにおいてすら満足な人間関係を構築することができずに孤立する中高年の日本人男性の姿であった。今回の調査で出会った日本人の中高年男性は既存の集団のいずれにも完全には属さないタイプであったと考えられる。

これまでの日本の出移民と「外こもり」を比較すると、貧困化と非就労化の傾向が浮かび上がり、時代背景の違いに基づくPush要因とPull要因の差が大きく影響していると考えられる。出稼ぎの労働移民は、国内の雇用難と人口増加というPush要因と、海外における労働力不足というPull要因からの移住であり、海外駐在などの技能移民は企業の海外展開の活発化というPush要因とビジネス面で未開拓の市場が海外に多数存在するというPull要因からの移住であった。つまり、彼らは当初から労働や金稼ぎを目的としている。これに対し、「外こもり」はバブル崩壊にともなうデフレ不況が長引き、新興国の経済的台頭なども相まって経済成長が鈍化し、雇用環境の悪化や、働き続けることに希望を見出すことができない閉塞的な環境に置かれ、人間関係や個人の経済生活など内面の部分にまで悪影響が生じたことから移住を行っている。彼らに海外で労働し、収入を得ようという考えはなく、生活の程度も貧しくなっていたのである。これにより、海外において日本人イメージは、勤勉に働きながらも貧しい生活を送る労働移民が、技能移民となってからは勤勉に働き裕福な生活を送る存在へと変化し、さらに近年の「外こもり」が示すように労働をせずかつ貧しい存在へと変化していったことになる。

また、出移民が男性中心に行われている点も興味深い。その原因は2つ推測でき、まず日本社会における男性と女性の性差の問題が考えられる。日本においては、労働主体は男性であるという認識が根強く、日本の経済環境が悪化する中、働き手である世代に対する社会的、家族的要求が高まり、特に男性へ負担が集中してしまっているという可能性がある。働き続けることへのプレッシャー、働かない状態に対する批判的な視線、日本社会に

漂う閉塞感、悪化する周囲との人間関係など、これらが Push 要因となって男性に「外こもり」となるきっかけを与えていると考えるのが自然だ。2 つ目に、東南アジアなど「外こもり」が多く生活するエリアの治安的、衛生的問題に対する反応が「外こもり」の男女比率に影響しているとも考えられる。この 2 つの要因が合わさった結果として「外こもり」が男性を中心に誕生したということが考えられる。この日本固有の課題という前者については、これが絶対的な原因であるかどうかは残念ながら現状では判断できない。今後、他国との比較などを通じてさらに掘り下げて研究することが必要であろう。

「外こもり」たちの今後については、「外こもり」と呼ばれるような新しい形の日本の出移民は今後も増加していく可能性が高いということと、その様相は多様化の傾向を強め、様々な形の「新しい日本人」が生まれていくだろうという 2 点が指摘できよう。「外こもり」の数は増加の一途にあるし、ニートのような潜在的な「外こもり」が日本国内に数多く存在しているだろう。そまた、超高齢化社会の進行と日本の雇用環境の悪化は著しく、金銭的な不足から日本で十分な生活を送ることが困難な中高年の日本人が、男女を問わずに日本のセーフティーネットから漏れる形で海外へ出ていく可能性も高いと考えられる。これらを鑑みるに、従来の「外こもり」と呼ばれるような人々に限らず、今後も日本の出移民の増加と多様化が進むという説は十分に説得力があるだろう。

結語

ここでは筆者の研究の限界について述べた。依然として「外こもり」に関する統計データは不足しているし、筆者が作成した図表の中にも数多くの不明点が存在している。特に中高年の「外こもり」に対する研究は、数的にも質的にも今後さらなる取り組みが必要となるだろう。また、「外こもり」の今後の動向も大いに注目すべきである。「外こもり」の数の増減に限らず、その内実の変化も注目されるべきであるし、さらには「外こもり」生活が長期化し、青年層の「外こもり」が中高年に差し掛かるにつれ、日本に帰国するのか、あるいは現地に残るのか、家族形成は行おうのかといった点も研究対象にできるであろう。さらに、タイ人など現地の人々や受け入れ先国にとって「外こもり」がどのような存在として捉えられ、その眼差しがどのようなものであるのかといった点も議題として残されている。仮に「外こもり」がこれ以上増加するようであれば、これまでの移民研究と同様に現地への適応、共存に関するトピックも取り扱われることになるだろう。

日本の新たな出移民としての「外こもり」は、日本社会を取り巻く環境や日本の社会問題の写し鏡である。彼らの未来は、21 世紀の日本の行く末にあわせてじっくりと観察を続けたい。